

長野県革新懇ニュース

2015年8月号
(発行日8月10日)
年会費5000円(送料込)
振替 0510-3-15971

194

発行 日本と信州の明日をひらく県民懇話会
(長野県革新懇) 発行人: 山口光昭 編集長: 高村裕
〒380-8790 長野市県町593 高校教育会館内
TEL: 026-234-1231 FAX: 026-234-2219 E-mail: takamura.hiroshi.nagano-h@educas.jp

革新懇の3つの共同目標

- ①日本の経済を国民本位に転換し、暮らしが豊かになる日本をめざします。
- ②日本国憲法を生かし、自由と人権、民主主義が発展する日本をめざします。
- ③日米安保条約をなくし、非核・非同盟・中立の平和な日本をめざします。



1939年静岡県森町生まれ。62年東北大学国文科卒業、信濃毎日新聞に入社。77年論説委員となり、80年からコラム「斜面」を担当する。2005年常務取締役論説主幹を退任。

今の流れを変えることは十分可能だと信じる

花嶋堯春さん

(元信濃毎日新聞論説主幹)

新聞記者にはたまたま

Q 7月20日の教育関係者の集会ではお世話になりました。大変すばらしい講演でしたが、今日はさらに踏み込んでお話を伺いたいと思います。早速ですが、新聞記者をめざした動機についてお話し下さい。

A 結論から言うと新聞記者になったのは、たまたまの成り行きです。取り立てて自慢できるほど大志を抱いて飛び込んだわけではありません。私は静岡県周智郡森町の出身です。諏訪湖から流れ下る天竜川が伊那谷を抜けて奥三河に入り、静岡県境に達したあたりには佐久間ダムがあります。さらに南下して東寄りの遠州森、広沢虎造の浪曲『清水次郎長伝』に登場する森の石松の故郷と言った方が、話は早

いかもありません。平成の大合併でも浜松市とか袋井市などへの併合を拒みました。

昭和29年、その森高校へ進学しました。もともとは女学校だったところで、1学年150人余りの小さな学校です。しかも3分の2を女子が占め、男子は野球部もつけないほどひっそり、おとなしく、影の薄い存在でした。そこへ私たちの入学と同時に東京外語大出身の新進気鋭、元氣溢れる若い英語教師が赴任してきたのです。先生は田舎の中学を卒業したばかりの私たちの英語が、全く駄目なことにあきれたのでしょう。授業ではABCの基礎からやり直し、放課後は真つ暗になるまで補習です。ときにはコッペパンまで食べさせてくれ、折に触れて「世の中は広い」「学校の中だけに拘るな」「世界に向けて勉強しろ」と熱っぽく発破をかけた。あえて申せば、こうした刺激で目覚めさせられたことが、後になつて思いがけず新聞の世界に足を踏み入れた遠因の一つになつたような気がします。

これと関連していますけれど、そんな叱咤激励の中で次第に勉強の意味、喜びが分かるようになっていき、3年生で進路を決める頃、大学に行ってみようという気になつていました。

戦後の6・3・3・4制の新たな学校制度になつて10年です。それまでは農山村の子は、高等小学校を卒業すると農業の手伝いをするか、丁稚奉公に出るのが普通でした。8人兄弟の6番目の私の場合も、兄や姉たちはそうです。比べて高校だけでも恵まれているのに大学進学となれば、大い

に身勝手な望みでした。兄弟の手前も心苦しかったのですが、例の英語教師の口添えもあり、認めてもらったのです。

1年浪人し、生活費の安い仙台の東北大学文学部に入學しました。60年安保で国中が熱くなった時代、アルバイトに追われ、集会やデモに参加し、やっとなすれすれで卒業です。静岡県の高校教師になるかと採用試験を受けたところ不合格でした。後はどうするか頭を抱えていた時に大学の掲示板で信毎の記者募集を目にし、受けてみたのです。幸い合格できたという次第です。申し訳ないくらい志が低いですが、できることならもつと格好のいい話しかたかったです。

駆け出しは警察担当

Q 信毎に入社されてからは、どんな分野を担当されたのですか？

A 入社3か月の見習い研修を経て、最初は上田支社に配属されました。取材のイロハを覚えたのは上田時代です。今でもそうだと思いますが、駆け出し記者はたいがい警察担当になるんですね。警察の広報担当は署長を補佐する次長ですので、次長の机の周辺で待機しているような動きを見えています。パトカーが出動すればそれを追いかける、消防車や救急車のサイレンが聞こえれば駆けつけて火事や事故を取材する……。そんなことをしていました。なぜ、駆け出しの記者に警察を担当させるかという、警察が扱う事件、事故などは社会の縮図だからです。人々の善悪、人間ドラマが揃っています。事件

が起きて、逮捕者が出て、検察庁に送られ、裁判になる。そんな経過の中で社会のさまざまな仕組みが分かってきます。たとえ大学の法学部を出ていても、実際の現場で起こっていることは学んでいまいせん。とてもいい社会勉強の場になります。

もう一つは、新人記者が人付き合いの仕方を鍛えられるからです。市役所、町村役場、県庁の出先機関など普通の役所は新米記者でも丁寧に対応してくれませんが、警察のペテラン刑事ともなると大学出たての若造など鼻であしらつてまともに相手にしません。何とか付き合いの糸口を見つけてようと努力する過程を通じて、人との接し方を訓練させられます。当直の夜などに将棋の相手をしたりしてだんだん信頼関係ができていきます。「きょうは刑事課の連中、皆あつちの方へ行つて何か聞き込みをやつてるぞ」というように情報をくれるようになります。

私のいた上田支社は、若い記者が3人で、その上に支社長がいました。支社長の仕事の半分は記者教育です。1年、2年、3年と手とり足とりしながら一人前に育てていきます。いい記者を育てた支社長は評価される訳です。若い記者からすると、いい支社長に巡り合えるかどうかが大きく影響します。その点で、私は幸せだったと思います。厳しいところもありましたが、人情味のある大先輩でした。

人気いま1つの論説

Q 論説委員はどういう経過でなられたのですか？

A 記者の仕事というのは概してまとまりがないものですね。次々に起きる出来事に忙殺され、とかくその日暮らしになりやすい。だから、自分でテーマを設定して、それを追求していくということがなかなかできません。私としては、何か継続的に取り組むテーマを持ちたいという思いがありました。入社6年目、編集局で街道を訪ね歩く連載企画が持ち上がり、執筆のお鉢が回ってきた時は、いわば願ったりかなったりです。「道と人―新善光寺道図会」と題して半年間週1回、これに打ち込みました。当時は丁度高度経済成長期で環境問題が注目されており、街道周辺の移り変わりを通じて地域のさまざまな問題を歴史的視点から掘り起こすことができました。その後、教育担当になりましたが、当時は週1回1ページの教育特集があり、それを埋めるには結構な筆力が必要でした。街道歩きの記事が役に立ちました。そうこうしているうちに教育問題を扱える論説委員が必要という話になり、私に声がかかったのです。今は時代が変わつて論説や文化・学芸部に人気があるようですが、当時は、論説はあまり歓迎されていませんでした。やはり花形は第一線でニュースを追う報道部でしたね。ともあれ、38歳から論説委員を務め、28年間やりました。

論説委員の大きな仕事は社説の執筆です。当時4〜5人の論説委員がいましたが、毎日11時から1時間半ほど翌日掲載の社説のテーマ、論点を踏まえて話し合い、その議論を踏

【2面に続く】